

### (15) 医学教育FD/IT活用研究委員会

本委員会（委員長：内山隆久、日本大学）は20年6月、9月、21年3月の計3回開催した。医学教育では到達目標が明確であり、モデルコアカリキュラムも明確になっていることから、「教員の教育力」に絞った検討を行うこととした。教育の質の向上には、教員の教育力の把握とその向上・改善が重要であること、そのための方策として「学生の学習到達度を測るための手法（例えばポートフォリオ）」に加え、教員の教育力の把握とその向上・改善を目的としたティーチングポートフォリオの導入、およびその成果を活用したFDについて検討する必要があると判断し、本年度はティーチングポートフォリオの研究を行うことにした。第2回委員会ではティーチングポートフォリオについて、この方面に詳しい専門家の話を伺うこととなり、20年9月8日に以下の通り歯学、薬学分野のFD/IT活用研究委員会等と合同・連携した研究会を実施した。

#### <医・歯・薬学教育FD/IT活用研究委員会合同研究会の概要>

##### 1. 「学生のポートフォリオ」の実践事例

講師：向井美恵先生（昭和大学歯学部口腔衛生学教室教授）

口腔衛生学の教育に、社会と歯科医療を結びつけることを目的にして1-5年まで通して、ポートフォリオを利用している。1年生では生活と健康をテーマに、外部の施設で早期体験学習を行いながら、気付き、事態や状況を判断できる力を養う教育をし、コミュニケーションを重視した実習後の振り返りノートや成長報告で、ポートフォリオの導入をしている。2年生では、福祉施設現場で介護による支援をしながら、口腔ケアの体験と福祉や環境の情報をポートフォリオ化している。3年生では、療育施設で実践診療に携わる中で、目標の設定、体験、成長報告をすることで、実習の振り返りができる。4年生では、学内教育が主体になり、CBTやOSCEを導入している。5年生では、口腔ケアの健康支援プログラム（ケアプラン）を学生自ら作成し、施設で実践する。患者の生活機能を評価し、これに基づいて嚥下リハビリや口腔内チェックを行う。患者ごとの支援プログラムを自分で作る。本学習では、目標設定、情報の入手、実践と自己評価、成長確認が一貫された教育システムとして構築されている。6年生には、今までの積み重ねを凝縮ポートフォリオ化して、卒後研修に生かしていく。将来は、デジタル化の方向を目指している。解決すべき問題として、評価基準や他の教科との関連性が挙げられた。

##### 2. FDに高い効果をもたらす「プロジェクト学習とポートフォリオ評価」の基本と活用

講師：鈴木敏恵先生（千葉大特任教授）

教育者の教育能力を高めることがFDであり、コンピテンシーとは自らが獲得した知識や技術を現実に生かし、応用（行動）できる力と明確に定義した。自分の頭で考え、自主的に行動できる学生を育てることが教育の目的で、プロジェクト学習とポートフォリオの組み合わせで実現できる。プロジェクト学習では、最初に明確なビジョン（目的、願望：何のためにやりたいのか）とゴール（具体的な目標）を定め、全体像を掴む（俯瞰）。ゴールに向かって進むその様々な過程で、ポートフォリオとして集めた一元化した情報を使って発表し合い、他の学生と幾つかの情報を共有する。最後に、凝縮ポートフォリオとして、論理的にまとめあげる（思考を可視化することが重要）。社会への貢献性、他人にも役に立つまとめ（エビデンスのある提案）になっているかどうか重点を置いて評価することが重要。自分の考えを客観的に見て、段階的に実現を目指す。その過程で振り返り評価、自己評価を行うので、自分の成長をも確認できる。自己評価については、苦労した点や思考過程、他人との比較などを具体的に記述する。教育を始める前に、学生に気付き、課題の発見や解決の手順を容易にするために、ポートフォリオを説明し、導入する。最終目標は、具体的に社会に役立つ提案であることを定めている点に、注目したい。最後に凝縮ポートフォリオで自らの思考を客観的にまとめ上げることにより、将来のモチベーション形成に役立つ。

3. 医・歯・薬学教育の中でポートフォリオをどのように生かせるかは、教育にどう対座しているのか現状を俯瞰してみる（シラバス、コアカリ、国試など）とそこからポートフォリオを導入すべき分野が出てくることが確認された。